21PO-am384

児童を対象とした薬の適正使用テキストと体験実習による薬教育の評価（第6報）—わくわくおくすり教室—

○齋藤 百枝美[1], 北 加代子[1], 渡部 多真紀[1], 安藤 崇仁[1], 佐藤 典子[1], 高橋 和子[1], 宮本 法子[2], 栗原 順一[1]（[1]帝京大薬，[2]東京薬大薬）

【目的】国民が医薬品を適正に使用することができるように 2012 年から中学校、2013 年から高校の薬教育が始まっているが、小学校の学習指導要領に薬教育は導入されていない。我々は小学校から薬教育が必要と考え、小学生を対象としてお薬教室を実施し、その評価を行った。【方法】小学 3、4、5 年生を対象として、2018 年 8 月、帝京大学薬学部実習室で「わくわくお薬教室」を実施した。内容は講義（薬の体内動態、薬物血中濃度、振り返り）、体験実習（手洗い、正しい目薬の使い方、カプセル実験、身近な薬の飲みあわせ）の約 2 時間で実施した。参加者 29 名を対象として事前・事後にアンケートを実施した。なお、アンケートは倫理委員会の承認を得て実施した。【結果および考察】アンケート回収率は 100%であった。薬の正しい使い方の知識（10 項目、10 点満点）に関して、事前平均 8.0 点から事後平均 9.9 点へ有意に上昇した（p＝0.000）。誤った回答として最も多かったものは「目薬をつけた後は目をぱちぱちする」（79%）であった。また、「わからない」との回答は「くすりはコップ 1 杯の水で飲む」（28%）が最も多く、次いで「目薬を使う前に手を洗う」（21%）であった。事前の「薬について誰に相談するか（複数回答）」は、医師、薬剤師、家族が各 19 名と最も多かった。事後の実習項目の理解度については児童全員が「よくわかった」と回答した。また、事後「もしあなたが病気になって薬を使う場合、今回の授業や体験学習は役に立つと思いますか」について、全員が「とても役に立つと思う」「役に立つ」と回答した。これらのことから薬教育は健康に関する良い習慣が身に付く小学生から開始し、年齢に応じて体系的に行うことが望ましいと考える。さらに、薬教育を受けていない保護者や高齢者などを始めとし、国民的な薬教育が早急に求められる。